川根誠先生のご退職にあたって

法学部長　石上　泰州

川根誠先生は平成二四年に税法担当の教授として本学にご着任され、爾来、八年間にわたり、精力的に本学の教育・研究、運営に尽くしてくださいました。定めとは申せ、この年度末をもちまして、先生がご退職されることは、誠に寂しい限りであります。

川根先生は、昭和二七年、石川県でお生まれになり、中央大学法学部をご卒業後は同大学大学院の法学研究科に進学されました。修士課程の修了後は国税庁に奉職され、まずは長官官房の総務課に配属されました。税務行政の最前線でのご活躍を経て、熊本国税局小林税務署長、東京国税局調査第二部長、札幌国税局不服審査所長など、要職を次々と歴任され、平成二二年には税務大学校の副校長に就任されました。この間、先生は税制の企画立案にも関与され、平成一〇年制定の「電子帳簿保存法」は、先生が、経済界の意見の取りまとめから国会筋への根まわしまで、法案の企画責任者として成立にご尽力されたとのことです。

そして、平成二四年、当時、本学の税法担当教授でいらっしゃいました鳥居勝先生の後任として、本学へご着任いただく運びとなりました。長らく税務行政の現場に身を置かれただけでなく、中枢の企画・管理部門において要職を務められ、さらには研修部門のナンバーツーに就かれるなど、税法担当の実務家教員としては、これ以上望むべくもないというキャリアをご経験された先生をお招きできたことは、本学にとりまして、まことに光栄、かつ、幸運なこ

とでございまして、一同、大いに歓んだのを記憶しております。

本学におきましては、先生には、学部学生への教育に加え、特に、大学院生のご指導に力を注いでいただきました。本学の大学院法学研究科は、税理士資格の取得を目指して入学する学生が大半を占めておりますので、税法担当の川根先生には、そうした学生全員の指導をお引き受けいただくことになります。毎学年、十名近い大学院生を指導教授として指導することは、尋常ならざるエネルギーと労力を要するものと申し上げねばなりません。そうしたなかで、川根先生の論文指導は、手抜きなど一切ない、まさに「真摯」そのものでございましたが、そうした姿勢は、国家資格たる税理士を社会に輩出することについて、並々ならぬ責任感をお持ちであるが故のことだろうと感じいっておりました。ただし、先生は、単に厳格な姿勢で学生と向き合うのではなく、多くの学生が職を持ちながらの多忙な研究生活を送るなかで、個々の学生の事情や立場を十分に慮りつつ、温かく励ましながら指導されているように拝見しておりました。有能な行政マンは、優れた教師でもあるのかと、感嘆すること度々でありました。

川根先生のご指導を仰ぎ、現在、税理士として活躍している修了生は多数にのぼりますが、熱意あふれる先生のご指導に感謝し、また、先生の誠実で朗らかなお人柄に惹かれた「川根門下」の面々による交流は、脈々と続いていると伺っております。

こうして川根先生は、本学大学院の、まさに屋台骨を支え続けてくださったのであり、有為の人材を輩出する大学院を有する大学として本学が社会に認知されている現状は、先生のご尽力によってもたらされたと申し上げて、決して過言ではございません。本学大学院の存続と発展に対する先生の深甚なるご功績に対し、あらためまして、衷心からの御礼と感謝を捧げたいと存じます。心残りを申せば、大学院の授業を行うサテライトキャンパスの教育・研究環境は、きわめて不十分なものであり、時折、先生からも厳しくご指摘を頂戴していたにも関わらず、満足いく対応が

ほとんど出来なかったことです。このことは、先生から残していただいた重い宿題として、肝に銘じていかねばならぬと覚悟しております。

大学院へのご貢献ばかり述べてまいりましたが、もとより、先生は本学の教育・研究、運営等々、全般にわたり、常に誠意をもってご尽力くださいました。時々の学長からの信頼も厚く、図書館長やキャリアセンター長といった要職をしばしば任されておられました。同時に、一人の教員として汗をかくことも厭いませんで、一例を申せば、公務員試験の受験者のための模擬面接をやりましょう、という際には、真っ先に手をあげてくださり、熱心に面接指導にあたっていただいたことを思い起こします。公務員試験の面接現場を知悉されている先生にご指導をいただけたことは、受験生はもちろんのこと、我々教職員にとりましても大変に得難い経験となっております。

川根先生は、税務行政のプロフェッショナルとしての実務家ご出身の教授ですが、同時に、研究者出身の教授以上に、アカデミックという言葉がピタリとくる教授でいらっしゃいました。大学教授らしい大学教授、と申し上げたらよろしいでしょうか。学問と学生に対する真摯な姿勢が、そのように感じさせてくださったのかと思います。

あらためて、衷心よりの感謝と御礼を申し上げ、献辞とさせていただきます。川根先生、本当にありがとうございました。